〈実践報告〉

「生活科指導法基礎」の授業づくりにおける「信大茂菅ふるさと農場」の意義（２）

土井進　信州大学教育学部教育科学講座

キーワード：生活科指導法基礎，信大茂菅ふるさと農場，気付き，林部信造翁，JA ながの

１．本稿の目的

生活科は平成元年３月に改訂された小学校学習指導要領において新設された。その後，平成10年12月の改訂において，「直接かかわる活動や体験」を一層重視することが指摘され，今回の平成20年３月の改訂では，「気付きの明確化と気付きの質を高める学習指導の充実」を図ることが強く要請された。新たに作成された小学校学習指導要領解説生活編では，「この気付きは，対象に対する一人一人の認識であり，児童の主体的な活動によって生まれるものである。また，気付きは次の自発的な活動を誘発するものとなる」と解説されている。

このような「気付き」を中核とする生活科改訂の趣旨をどのように実現していくかは，教員養成段階の授業づくりにおいても極めて重要な課題である。何故なら寺尾慎一（平成20年）が指摘しているように，「児童の気付きを高める道筋や方策，その意義を示してこそ，それを固有な用語として掲げた生活科教育の価値を一段と明確にする」ことになるからである。(1)

「生活科指導法基礎」(2)の授業づくりにおいては，学生自身が豊かな「気付き」に感動を覚えるような道筋や方策を具体的事例として展開することが今求められているといえよう。そして，「生活科指導法基礎」の授業においては具体的な活動や体験の様相や内容だけでなく，それを通して学生がいかなる資質・能力を培ったと自覚しているのか，学生の成長の内実を解明していくことである。

本稿は，平成20年度後期に実施した「生活科指導法基礎C」（月曜５限）と「生活科指導法基礎D」（木曜５限）の授業実践報告である。長野市茂菅地区農家林部信造翁(3)のご協力のもとに管理運営している「信大茂菅ふるさと農場」(4)において，月曜78名，木曜46名の学生が農作業の具体的な活動や体験を通して自覚した知的な「気付き」を集計して５つの観点から分析した。これによって得られた知見をもとに更なる授業改善を図ることを目的としている。

２．「生活科指導法基礎D」のシラバス

次に掲げるシラバスは，学生に授業前に予定として提示したものとは異なっている点があることをお断りしなければならない。この授業は農場での具体的な活動や体験を内容としているので，作業の進行具合や天候に応じて柔軟に対応せざるを得ないからである。

2.1 授業のねらい

長野市茂菅地区に開設した「信大茂菅ふるさと農場」(9年目）までの往復の道のりにおいて、地域社会の人々とのふれあいを体験する。また，米づくり，じゃがいも，さつまいもづくりなどの農作業体験に取り組むことによって，食物を生産することの大変さを実感し，食育の重要性に気づく。また，共に農作業体験で汗を流すことによって，学生同士のコミュニケーションを活発にする。さらに水田や畑にいる様々な植物や動物とのふれあいを通して大自然の営みに思いを致す。教科書『小学校学習指導要領解説・生活編』を熟読することを通して，「生活科」の２年間にわたる年間指導計画の作成と単元の指導計画を作成する。

2.2 学生が達成すべき目標

(1)茂菅地区の人々に出会ったら明るく元気なあいさつができること。

(2)茂菅までの道中では交通安全に十分気をつけること。横に広がらないで１列で歩くこと。

(3)畑や水田での農作業に主体的に参加することによって，自然とふれあうことの喜びを体験すること。また，自然体験活動の人間形成における重要性について自分の考えをまとめることができること。

(4)農作業の活動を学生同士が共同で行うことによって，人と人がふれあう喜びを体験すること。また，社会体験活動の人間形成における重要性について自分の考えをまとめることができること。

(5)様々な自然体験や社会体験を通して，自分自身や自分の生活について考えるとともに生活科の授業を構想することができること。

(6)「土づくり」に取り組むことが，良好な自然環境を維持するとともに，人間の心に天地自然の恵みに対する感謝の念を育み「人づくり」につながることを体得すること。

(7)５人で班を編成し，各班での共同作業によって仕事を進める。

(8)生協の生ゴミを各班の担当曜日に堆肥置き場まで運ぶ。この作業によって環境ISO14001取得の活動に参画する。

2.3 授業内容とその展開

(1)10月２日　茂菅農場へ徒歩20分で歩き，地域社会の様子を観察，班編成，鍬，鎌の使い方，長靴の使用方法説明，生協生ゴミの堆肥化作業の手順についての説明。

(2)10月９日　畑づくり。耕作し畝をつくる。各班で栽培したい作物の種類を相談して決める。

(3)10月16日　大根・ほうれんそう・小麦・二十日大根・長ネギ・春菊・白菜などの種まき。班の畝の看板づくり。

(4)10月23日　茂菅地区の林部信造翁のりんご園へ。林部さんからサンふじの葉摘み作業

の仕方についての説明。全員に美味しいアルプス乙女を４個いただいて帰る。

(5)10月30日　植えた種から発芽あり。畑の世話。９名が脚立を使った葉摘み作業。

(6)11月６日　６名がりんごの玉まわし作業。畑の耕作作業とシラネ小麦の種まき。さつまいも掘り，焼きいも会の準備。

(7)11月13日　焼きいも大会。田じまいの作業（鍬で水田を掘り起こす）。押し切りで藁を細かく切断し水田に播く。畑の周りの草刈り作業。刈った草は野積みにして堆肥にする。

(8)11月21日　干し柿づくり。柿とり器具を使って柿をとる。鉈で枝を切る。武道場で包丁で柿の皮をむく。１本の紐に７個を縛る。日当たりのよい場所につるす。生協隣の欅の大木の落ち葉を拾って堆肥づくり。

(9)11月27日　寒いなかで田じまいの作業。畑を耕作し畝を作って玉葱の苗植え。３年間遊休化していた２アールの畑の開墾作業。直径５cmの大きな木の根っこ掘り。

(10)12月４日　小春日和のなかで田じまいの作業。畑じまいの作業（畑の周りの草刈り作業）。高さ２メートルの草の野積みができる。「大地に礼」。大根の収穫作業。

(11)12月11日　しなのき会館の台所を使って大根パーティー。大根27本使用，５種類の料理誕生。

(12)12月18日　鍬・鎌使いの達人コンテスト。２グループに別れ，一方のグループが10分間グランド脇の花壇用地の草刈りと畝づくりを行う。その働きぶりを他のグループが評価する。小テスト①「総説・生活科の目標」と班ごとの討議。

(13)1月8日　小テスト②「生活科の内容」小テスト③「指導計画の作成等」。班ごとに２年間の指導計画を作成する。干し柿を一人３個味わう。達人コンテストの表彰式（金・銀・銅）

(14)1月22日　小テスト④「生活科の学習指導」。年間指導計画の発表会，各班５分。授業評価入力。

(15)1月29日　試験　穴埋め問題26題。小論文「茂菅ふるさと農場における具体的な活動や体験を通して，あなたが「気づいたこと」や「学んだこと」を３点にまとめ，それぞれに小見出しをつけて論述しなさい。

2.4　成績評価

(1)毎回の活動記録を200字原稿用紙に書きポートフォリオを作成する。必ず調べ学習を加える。

(2)生活科と「信大茂菅ふるさと農場」に関する小論文試験，生活科の基礎知識に関する試験に基づいて評価する。

2.5　履修上の注意

(1)農作業を行うので作業できる服装で参加する。

(2)各自のカバン等の荷物は武道場に置き，授業は原則として「信大茂菅ふるさと農場」で行う。雨の日は武道場で行う。

(3)農場へは武道場のそばに置いてある長靴をはいて出かける。

(4)農場から大学に戻ったら，必ず長靴の泥を洗って下足置き場に整頓して返す。

(5)使った軍手は洗って物干しにかけておく。

(6)欠席した分は必ず補充の活動(水やりや草刈りなど)を行い，ポートフォリオに入れる。

2.6 教科書

『小学校学習指導要領解説・生活編』 平成20年 文部科学省

2.7 参考文献

洞出直美「八代目茂菅ふるさと農場」 土井進編『「信大YOU遊世間」の教師教育学研究』第14集 信州大学教育学部 2008年

土井進「学校と社会を結ぶ活動 (学社融合)」「ゲストティチャーに学ぶ生活科」佐島群巳・奥井智久編『新訂生活科授業研究』 教育出版 2001年 2000円

門脇厚司『子どもの社会力』 岩波新書 1999年 660円

3. 「信大茂菅ふるさと農場」における学生の「気付き」の分類と事例紹介

「生活科指導法基礎D」を受講した学生は46名であった。この授業の総まとめとして学生が「信大茂菅ふるさと農場」での具体的な活動や体験を通して，どのような「気付き」を得たかを3点にしぼって論述することを課題とした。そこに記述された3つの「気付き」のタイトルを集計して次の5つの観点から分類した。

① 自分自身や生活科への「気付き」

② 生活上必要な習慣や技能への「気付き」

③ 学生仲間とのかかわりによる「気付き」

④ 地域社会とのかかわりによる「気付き」

⑤ 茂菅の大地とのかかわりによる「気付き」

同様にして月曜5限の「生活科指導法基礎C」を受講した78名についても5つに分類した。これらの中から印象深い事例を次に掲げることにしたい。

3.1 自分自身や生活科への「気付き」の事例

(1)生活科の重要性

私はこの授業を受けるまで生活科を軽く見ていた。心のどこかで「社会と理科のつなぎでしょ」と感じている部分があった。しかし，この授業を通じて作業を実際にしたり，大根パーティー・焼きいも・干し柿を作るときに感じた人の温かさ，協力の重要性，人と交わることの大切さを実感した。最後に学習指導要領を学んだが，今まで感じてきたことがそのまま書かれている気がして自分の中にすんなり入ってきた。実際に教員になったときに同じことを子どもたちにも味わって欲しい。生活科の可能性と重要性を深く学んだ。

(2)本当の自立

自立という言葉は多義的です。何をもって自立というのか基準がないからでしょう。しかし，この授業全体を思い返すと，自立のもとになる部分，つまり自立への基礎は自ら考

え，自ら学ぶ姿勢にあると私は考えるようになりました。そして，生活科はその自立への基礎を養うのに最適な授業だと思います。私たちが茂菅で植えたネギはなかなか芽を出しませんでした。他の班はもう芽が出ていたのにどうして私たちの班だけ芽が出ないのかいろいろ考えました。そして自分たちで考えた結果，こまめに水をやりと肥料も追加することにしました。すると１週間後にはちゃんと芽が出ていました。私は本当に感動しました。普段の生活では味わえない気持ちを味わうことができました。

そして，これこそが自立への基礎となるものだと私は思います。自ら考え自ら試行錯誤し，結果として喜びを見いだせるという行為こそ，自立への第１歩になるということを学びました。私が教師になったときには，子どもたちが本当の意味で自立へと近づけるような支援をしていきたいです。

(3) 入学したばかりの１年生への「生活科」の紹介

「せ」・・・せいちょうしよう！

「い」・・・いっぱいあそぼう！

「か」・・・かかわろう！

「つ」・・・つくろう！

(4) 児童の自主性を尊重した授業展開の重要性

農作業を初めて行う学生が多い中でも，先生はあまり多くの指示を出さず学生に作業を任せていた。教えてもらうだけの作業より，自分たちで試行錯誤しながら作業する方が得るものは大きいし，実際自分たちが一から作った畑で育った立派な野沢菜を見たときは，やはり何者にも代え難い気持ちになった。そうやって児童の自主的な活動を多く取り入れながら展開することこそ，生活科という授業において最も大切なことだと自分たちが自主的な作業を進める中で感じた。

(5) 振り返り（リフレクション）の中で

「振り返り」は毎回200字原稿用紙だったので，あまり負担と思わずに取り組むことができた。自分の「振り返りシート」を返却されて再度振り返ってみて気付いたことは，「自分は教師の立場から振り返りをしている」ということと，「意外と文章が上手いのではないか」ということである。「活動の振り返り」であったのに，時々教師の視点から考えている自分に気付き，なぜか少しうれしかった。また，活動の海容や思ったことが端的にまとめられていて分かりやすく書けているなと思えたことも自信なった。

生活科は気軽に遊びの要素も交えて行われる教科であるが，やはり「振り返り」の時間を充分に取る必要があると学んだ。もし教師になり生活科を行うことになったら，「振り返り」を少しずつでも継続させていきたいと思った。

(6) 体を使う授業でもあり，頭を使う授業でもある

この授業を通して思ったのは，自分たちで考え，自分たちで工夫し，自分たちで動くことがどれだけ難しく，大変で，また大切かということだ。「○○を育てたい」「じゃあいつ頃播けばいいかなあ？」「○○は今の時期では育たないぞ」「それじゃあ△△にしたらどう

だろう」と考えた後に，「△△を育てるためにあれとこれとそれをやらなくてはいけない」「誰がやるの？」「じゃあ私がやるよ」と自分たちでするべきこと，しなくてはならないことを考え行動に移す。「うまくいかない！」「何が良くないんだ」「これをああしてみたらどうだろう」。問題が発生したときに，自分たちで考えて問題解決する力というのも試されることになった。

この業は基本的に体を使う授業であったが，それと同時に頭を使う授業でもあった。自分たちで考えて，体を動かさないと意味がないのだと思う。教師になって生活科をやる時は，子どもにも自分で考え，自分で動くという経験をさせてあげられたらいいと思った。

3.2 生活上必要な習慣や技能への「気付き」の事例

(1) 農具について

茂菅での畑づくりでは一番始めに畑の草取りをしました。草取りのために自分で鎌を研いだのですが鎌を研ぐのは初めてだったので怪我をしないように研げるかとても緊張しました。私は実家で農作業の手伝いをする時も，祖父がきちんと研いでくれていた農具を使って作業をしていました。けれどもこの授業で自ら鎌を研ぎ，草取りをした経験を通して本当の農作業は農具で畑を耕すことから始まるのではなく，農具をしっかりと使えるように準備するところから始まるのだと知ることができました。この授業から農具の使い方とともに，準備の大切さを学ぶことができたと思います。

(2) 農業の秘密と大きな発見

私は田舎に住んでいて、祖父も農家だけれども農業について知らないことがたくさんあった。全く知らなかったというよりは，深くそれについて関わったり，考えたことがなかった。私が一番それを感じた体験は「田じまい」である。田んぼで稲を育てる一連の流れは田んぼばかりの町で毎日稲の成長を見るのを楽しみにして学校に通っていたので大体はよく知っていた。しかし，その裏側のことは考えたこともなかったため、私の中ではその一連の流れが田んぼのシステムになっていた。けれども「田じまい」という作業をして，田んぼの土はただ植えて放っておいたのではダメだということを知ることができた。私は稲刈りや脱穀しかしたことがなかったので，実は「田じまい」という作業があったということ土にもお休みをとってもらう必要があること，大地にも礼をすることが大切なのだということを初めて知った。このように自分がもうこういうものだと考えて，その通りにしか思っていなかったことも実は違っていたりするということが，自分の中で大きな発見だった。

(3) 自分の成長

この授業で私は多くのことを学びました。鎌は使ったことはあっても，もう研いである物しか使ったことがありませんでした。なので鎌の研ぎ方を知りました。鍬などの使い方はおじいちゃんなどに習ってやったことがあるので分かりました。しかし，さあ何かを育てようとなったとき，はじめは種をただ植えるだけと思っていましたが，何を植えていいか分かりません。この季節に何を植えたら育つのか何て事を考えたことはありませんでし

た。結局ホウレンソウを植えましたが，初めてホウレンソウの種を見ました。こんなに小さいのかと驚きました。

学校で行ってきた農作業などは環境が整えられ過ぎていて，何も考えることなくしていたので逆に何も分からない自分に驚きました。仲間と話し合いながら具体的な活動を行うことで，こんなにも学びがあるなんて思いませんでした。

3.3　学生仲間とのかかわりによる「気付き」の事例

(1) 農場にあふれる人と人のかかわり

農場で２ヶ月ほど農作業をしてみて，人とのかかわりの大切さを改めて感じた。何故なら農作業の横にはいつも友だちや先生がいたからである。畑を耕して畝を作るときも，種を播くときも，水をやるときも，芽が出てきた時も，リンゴの葉を摘んだ時も、そして大根パーティー・焼きいもの時も，いつもまわりに友だちがいて，だからこんなに楽しめたのだと感じる。鍬の使い方も教えあったし，種の播きかたも班のみんなで考えた。もしもこれを班ではなく１人でやっていたとしたら，楽しくないし寒さにも耐えられなかったと思う。現在，農業を営む人が減り日本では問題になっているが，人と人とのつながりの中に農場があれば，農作業の楽しさに気づく人がもっと増えると思う。１人でやるのではなく夫婦で，家族で，仲間で，人々の笑顔の中で農業が営まれたら良いなと考えた。

(2) 感謝の気持ちをもつこと

私がこの授業で一番学んだことは，感謝の気持ちをもつことです。何気なく口にしていた食料一つには，たくさんの人が苦労して育てているということに，授業で畑を耕したり種を播いたりして気づきました。食への感謝を忘れがちだと思いました。また，畑を貸して下さっている地主さんや地域の林部さん，自然や先生・友だちなどにも感謝の気持ちをもつことができました。大根パーティーの時，大根係の人たちが作ってくれたおいしいおでんを感謝の気持ちをもっていただきました。先生は感謝しなさいなどとは一言も言っていないのに，みんなが自然と感謝しているのを見て，生活科の授業はとてもステキな授業だと感じました。

(3) 仲間との協力

この授業での畑づくりの時に仲間との協力について気づきました。私たちは今，大学に入ってから特に個人個人という単位で授業を受けています。個人ということは自分の力のみで物事を進めなければいけません。最近私の周りでは，そのように個々で動く時間が多く全く協力という言葉すら頭に出てきませんでした。しかし，今回畑を耕したり，種を播いたり，植えた作物を育てるという作業で，久しぶりに協力することの大切さを学びました。やはりこのような作業だと見知らぬ人間同士でも協力して行い作業を進めます。またこのような作業をとおして知らない人と仲良くもなれます。協力するということは，ただ作業を上手く運ぶだけでなく人との交流を活発にする場にもなります。協力という事を忘れていましたが，これを機に大切にしていきたいです。

(4) メンバーこそ収穫

植えた種が芽を出していたことに班のメンバーで喜び，一方芽を出していない場所を見ては悲しんだ。そして，ほんの少しだが収穫物があり，それを班のメンバーで共に調理して食べた。たった４ヶ月ほどの付き合いの中で，これほどの喜びを共に分かち合えたメンバーが，率直な感想をいえば私にとっては収穫なのかもしれないが，共に喜ぶメンバーがいれば、それは１人の喜びの２倍，３倍になるのではないだろうか。しかし，それは苦労をしていた前提があってのことである。協力という言葉の重要さを茂菅の中で知れたと同時に、メンバーこそ収穫でもあると私は思う。

3.4 地域社会とのかかわりによる「気付き」

(1) 農家の方の大変さ

私は農場やりんごの葉つみを通して，農家の方の大変さに改めて気づいた。農業という仕事に休みの日はない。また，会社などと違って定時の仕事ではない。雨が降ったとしても，とても寒い日だとしても作業をしなければならない日はたくさんある。また，今回の受講が後期だったので日がとても短かった。そのようななかでりんごの葉つみをやらせていただいたが，すぐに暗くなってしまい，また寒くなってきてしまった。私たちは暗くなったところで終わりである。しかし，農家の方はその日の分をやり終えるまで続けなければならないのである。しかもりんごの木ということで，ほとんどが人間より高い所でありずっと手を伸ばしていたり，足を踏ん張ったりとかなりの重労働である。農業というものは自然相手の仕事であり，予測できないことが多い。農業の大変さを知った。

(2) 地域とのつながり

この授業で私たちは茂菅地区の農家林部さんのりんご畑に行き，りんごの葉つみの手伝いをしました。大勢の大学生が作業を手伝ったため，りんごの葉つみをかなり早く終わらせることができたと思います。昔なら忙しい時期には近所の人々がそれぞれ交代でお互いの畑を手伝ったりしたのでしょう。しかし，現在はそのような助け合いがなかなか難しいため機械に頼って農作業をしなければなりません。この授業を通して農業は地域とのつながりを保つために大切なものなのだと感じました。信大の学生が近所の畑を手伝うことも地域とのつながりを作るために必要なことだと思います。そして，そのつながりはこれからも絶やしてはならないものだと思います。私はこの授業を通して農業から生まれる地域とのつながりに気づくことができました。

(3) 先生・地域の方々に支えられて

茂菅ふるさと農場での様々な農作業を体験して，自分たち学生は先生をはじめ多くの人々に支えられて学ぶことができているのだなと実感しました。授業で農場に向かうときは大学から少し離れているにもかかわらず，土井先生は毎回自転車で僕らと一緒に農場に通い様々な指導をしてくださいました。また，畑についてはほとんどのことを僕たちの自主性に任せていただき，僕たちも自分たちで考え，話し合い，協力し合うことができました。また，あの農場が使えたのも地域の若松さんという地主さんやJAながのが，わざわざ僕達のために土地を貸して下さっているということを知りました。本当にありがたいこと

だと僕は思いました。林部さんのりんご畑に入り、葉摘みをしてりんごに日光が当たるようにした時などは感謝の気持ちを込めて精一杯頑張ることができました。自分は多くの人に支えられている。その方々への感謝の気持ちを決して忘れてはいけないと強く思いました。将来，子どもたちにもこのような感謝の気持ちが自然に生まれてくるような，様々な体験を指導できるようになりたいと思いました。

3.5　茂菅の大地とのかかわりによる「気付き」の事例

(1) 作物は鏡である

私は自分で野菜の種をまいて育てることが初めてだった。土を起こしたり水をやったりする中で，作物というものは育てた人の人柄や育て方がそのまま反映されるものであるということを学んだ。私たちが育てたのはネギだったのだが，土の起こし方や種の播き方があまりよくなかったのか，残念ながらあまり大きく成長しなかった。考えてみると土を起こすときや種を播くときに，作物のことを何も考えずに作業をしてしまっていた。作物も人や動物と同じように愛情を持って接する必要があるし，愛情以て接すればきっと応えてくれるものだと思う。「天地偽らず。農は天地に交わること近し。故に農は偽らず」（新渡戸稲造『農業本論』）という言葉の意味がわかった気がした。

(2) 畑を作ることの意味

鍬や鎌を使うのは初めてではないです。小学校・中学校で何度畑へ行って植えたり掘ったりしたでしょう。家の周りで行われる稲作を何度見かけていたことでしょう。農業の大切さは社会科の授業で学びました。だから農業は大切だということは，理屈として十分分かっていたつもりです。しかし，学校の授業で畑づくりをすることの意味は全く分かりませんでした。暑いし面倒くさいものだとしか思いませんでした。

しかし，この授業でまた畑作りをして，授業者としての視点から畑作りというものを見てみると印象が変わりました。社会科で言葉として学ぶのと生活科で体験を通して学ぶのとでは，やはり違うのです。生命を手にかけること，その行為が人間の心に感銘を与え，改めて自然の大切さに触れられるのだと思いました。紙上だけでは学べない学びを生活科で提供するのだと気付きました。

(3) 会話のチカラによる「田んぼ・畑セラピー」

寒いし，すぐに暗くなるし，茂菅までは坂道だし、行きたくないなーとよく思っていた。だが，授業がおわるころにはそんな気持ちはどこかへ行ってしまい，いつ「楽しかった」と感じることができた。それは，作業をしながらの友達との会話があるからである。１年生のころからの友達やグループ編成で初めて出会った友達もいる。どの友達とも畑での仕事を通して，その中で交わした言葉を通して，今までよりももっと絆を深めることができた。

不登校やいじめ問題を考えたとき，真っ先に思い浮かぶのは心理療法だったが，田んぼや畑での作業も役立つという話はとても興味深かった。いつか，会話のチカラを大切にした「田んぼ・畑セラピー」が登場したらおもしろいと思う。

(4) 体験から経験へ

私たちは小学校で必ず生活科という授業を受けています。しかし，生活科の知識が自分に付いているか？と考えると，忘れてしまっている部分がたくさんあり，茂菅ふるさと農場で活動をして自分の知識のなさを痛感しました。種を播くこと，間引き，草刈り・・どれをとっても完璧にこなすことができませんでした。改めて農場で体験することで学ぶことができましたし，とても新鮮でとても嬉しく思いました。先生の助言や友人の助言によって一つ一つこなすことができました。

これらを通して気付いたことは，体験をしてみないと（自分で何でもしてみないと）わからないし，力にならないということです。つまり，机上で学習し頭の中には入っていても，体全体で学ぶこと体験することが大切だということです。その体験一つ一つを大切にすることで，体験が経験に変わります。体験を積んで自分の経験にする。その過程がとても自分にとって力になるものであると感じました。

(5) 農業の楽しさ

私は農業が嫌いわけではなかったが，今回茂菅で作業をしてみて以前よりも農業が好きになった。農業は天候に左右されとても大変というイメージが大きかったが，農作業の中のコミュニケーション，収穫後の食事は実際はとても楽しい。授業では大根パーティーがあったは，私は自ら進んでダイコン係になった。季節にぴったりの「おでん」を作り皆で楽しく食べることができた。とてもおいしかった。

小学生は生活科の時間に畑で何かを作ることが多いが，私は先生たちが伝えたかった事がわかったような気がした。農家が減少している中で少しでも多くの人々が農業の楽しさを発見できたら良いと感じた。また，私は現在自家通いで家に畑もあるため，そこに自分で小さな農場を作りたいと思った。自給自足の生活がたくさん広まっていって欲しいとも思うので，教師になったら様々な人に農業の楽しさを教えていきたいと思った。

(6) 焼きいもパーティ

私は焼きいも係に立候補しました。小学校の収穫祭でも焼きいもを作りましたが，自分たちだけで薪づくり，火起こしからやるのは初めての経験でした。やりがいがあると思いました。先ず焼きいも係の人たちで集まって役割分担を決めました。芋を洗って切るチームと火起こしチームに分かれました。この時学んだのは自主性の大切さでした。係の中には自分かやると申し出た人たちがとても多く，その自主性のせいか役割も段取りもみな立候補制でスムーズに決まりました。自主性ややる気はチームの雰囲気を良いものにすると改めて学びました。

そんなわけで4限後に柔道場集合ということになり行ってみると，洗って切るチームの人たちが少ない時間に集中して洗って切られた芋が，新聞紙にくるまれ，水で濡らされていました。私たちは残りの芋に新聞紙を巻き付け，水に濡らし，できあがったものを分担して持って茂菅へと向かいました。この時に初めてしゃべった友達とは，今でも仲が良い

です。係にならなかったらきっと在学中にしゃべることはなかったと思います。係をやって本当によかったです。

火起こしは落ちていた木の枝やった新聞紙をもちいるなどして，皆で協力・工夫してやりました。火がつかなかったらどうしようという不安もあったのですが，無事火がついて燃え上がったときはホッとしました。そして，できあがった焼きいもを皆がおいしそうに食べているのを見て，大変だったけどやって良かったと思いました。自分たちが中心になって何かを作り，それで他の皆が笑顔になってくれた時の大きな喜びに気付かされた体験でした。

(7) 人はこうして学んでいく―押し切りの初体験―

茂菅での体験の仲で特に印象に残っているのは，押し切りで藁を切った作業である。最初は藁が挟まりうまく切れなかったが，「どうしたらうまく切れるだろう」と試行錯誤した。何度も繰り返す打ちに，どうすれば挟まらなくなるか，どんなふうにすると効率がいいかなどが分かってきた。初めて使う道具に戸惑いながらも，あきらめずにそれに向き合っていくなかで，「あっ，人はこうして自ら学んでいくのだな」と思った。自分が初めての物差しや定規を使った時のことは覚えていないが，きっと藁切りの時と同じように学んでいったのだろう。子どもたちがどのように学び取っていくのかを，大人になった自分が実際の体験を通じて気づけたことは非常に大きな収穫であった。同時に，教師は子どもの学びの過程にいつお関心を持ち，子どもに近い気持ちでいる必要があるということに気づかされた。このことを茂菅での体験を通して学び取ることができた。

４．学生の「気付き」に対する考察

筆者は平成12年10月１日に附属教育実践総合センターから教育科学講座に移籍し，布谷光俊氏の後任として生活科指導法を本務とすることになった。前年度に開拓したばかりの「信大茂菅ふるさと農場」があったので，ここを生活科の舞台として心機一転して授業づくりに取り組んでみようと決心したのであった。この日を境にして筆者の授業スタイルは背広・ネクタイから上下のつなぎへと一変し，授業の場所もキャンパスの講義室から茂菅農場へと様変わりした。この農場で学生が生活科の核心にふれることができ，将来生活科の授業を担当してみたいとまで思ってもらえるような授業を創るにはどうすればよいか悪戦苦闘の９年間を過ごしてきた。

９年目を迎えた今年度後期の授業において，上述のような学生たちの率直で素直で，しかも感動のある「気付き」に接することができた。授業者としてこれに勝る喜びはない。学生一人ひとりが桜梅桃李の個性を発揮して生活科の本質に迫る学びを実現していることがうれしい。この人たちはやがて教育者として飛翔するために求められる資質・能力の様々な内実を着実に育んでいるに違いないと確信している。

５．謝辞

茂菅の地で「生活科指導法」の授業を９年間続けてくることができましたのは，一重にJAながの営農指導部(5)の温かいご理解とご指導のおかげであります。また，地元にあって全てのトラブルに対応して下さっている林部信造翁ご夫妻のおかげであります。ここに衷心より感謝を捧げます。さらに前期15回，後期15回の授業だけでは教材としての田畑を維持管理していくことはとてもできません。通年にわたって農場に足を運んでくれた歴代の学生農場長・副農場長(6)の献身的な努力の賜であります。ここに深く御礼申しあげます。

註

(1) 寺尾慎一「気付きの質を高め，言語力を育成することへの期待」，日本生活科・総合的学習教育学会会報，NO. 33，P. 1，平成20年10月１日

(2)「生活科指導法基礎」の担当教員は本学部においては筆者一人である。前期にABの２コマ，後期にC・Dの２コマ，合計４コマを開講し受講学生数は約200名である。２年生が約６割，３年生が約３割，４年生が約１割である。

平成11年度（1999）に本学部は「臨床の知」を教育目標として教員組織と学生の教育組織を大きく改組した。この改組によって「総合・生活科教育分野」が誕生した。筆者は和田清教授・布谷光俊助教授とともにこの分野の創設に参画した。そして，平成11年度に入学し平成12年度に２年生となって長野キャンパスにやってきた学生たちが，「総合・生活科教育分野」の第１期生となった。

(3) 林部信造氏は昭和４年（1929）に長野市茂菅の生まれで３代目。初代は裾花川沿いで水車による精米業を営まれた。２代は養蚕業を営まれたが全国的な養蚕の衰えとともに，昭和27年（1952）にそれまでの桑畑に初めてりんごの木を植えた。３代目の林部信造氏はりんご栽培と稲作を専業とされている。

(4) 「信大茂菅ふるさと農場」の開設について林部信造氏は，「信大NOW」NO. 54（平成20年11月27日）の取材に応じて次のように述べている。「10年前ここはね，橋の建設工事の土が山盛りになって置かれていた場所で，遊休農地といっても固いグランド状態だった。それを雨が降るたびに少しずつ耕して，学生の皆さんが開墾していったんですよ。私は当初，学生に農業教えてくれなんていわれて断りました。でも土井先生が来られて，「人づくりのための土づくり，農業を通して学生を育てていきたい。学生自ら企画運営をします。開墾から学生にやらせてください」というので，それならって，手伝うことにしたんです」。

(5) JAながのへの協力依頼文

平成12年4月5日

JA長野中央会総務企画部企画開発課長　殿

ながの農業協同組合代表理事組合長　殿

信州大学教育学部長

藤沢謙一郎

「自然体験・社会体験実習について」（依頼）

拝啓　時下，ますますご清祥のこととお喜び申しあげます。

平素から，本学部の教育・研究につきましては，種々ご高配を賜り，厚くお礼申しあげます。

さて，本学部総合・生活科教育分野では，自然体験・社会体験実習を取り入れた「総合的な学習の時間」の指導ができる力を身につけるために，田・畑・山林を活用した様々な農業体験を経験する場として，貴施設での自然体験・社会体験実習を計画しました。

つきましては，下記の通り実施したいのでよろしくお願い致します。　敬具

記

1．　参加学生　「社会体験実習」　約30名

「生活科指導法基礎」　約200名

「総合演習」　約20名

2．　実施場所　貴指定の圃場（「信大茂菅ふるさと農場」）

3．　問い合わせ先・連絡先　〒380-8544　長野市西長野６－ロ

信州大学教育学部　担当教員　土井　進

TEL/FAX　026-238-4260

(6)歴代学生農場長・副農場長名

	年度	農場長・副農場長（専攻学年）	特色ある活動
1	平成12年度	杉山雅幸（野外４年） 千野加世子（生活３年）	荒廃地の開墾。畑作業のグループ制とオーナー制の比較考察を行った。
2	平成13年度	西澤俊輔（理数３年） 原山美樹（生活２年） 花村尚美（理数２年）	秋の田起こしが終わった水田に蓮華の種を播いた。春にきれいな花を咲かせた田んぼで子どもたちと草花遊びをした。
3	平成14年度	那須紋子（生活３年） 高橋和之（理数３年）	田植えの終わった水田に，佐久で購入したフナの稚魚4,500匹を放流し飼育。
4	平成15年度	北川伸尚（障害児３年） 宇良知子（生活３年）	茂菅米で餅つき，茂菅で収穫した完全無農薬の新米でお寿司パーティー
5	平成16年度	神林彩井（生活３年） 吉澤あすか（言語３年）	冬におはぎ作り。水田の畦に植えた大豆を収穫し，きなこにすりつぶした。
6	平成17年度	松井泉樹（生活３年） 川端智子（教育３年） 矢竹喜美子（理数３年）	ジャンボかぼちゃが２個大きく実った。第４回YOU遊フェスティバルの会場入り口に入場門として置いた。
7	平成18年度	平林照世（言語３年） 川辺裕作（教育３年） 細川李花（言語３年）	五穀豊穣といわれるが，五穀を実際に栽培したいと考えて米・麦・豆・粟・黍を栽培した。・落花生の栽培。

8	平成19年度	洞出直美（教育３年） 上田雄介（理数３）年	背中に「八代目茂菅組」と書かれた橙色のつなぎを着て作業した。
9	平成20年度	宮川はるな（言語３年） 中川　茜（生活３年） 原　卓也（理数３年）	田植えの終わった水田にザリガニを 20 匹放流し，子どもたちにザリガニつりをさせた。
10	平成21年度	飯島理沙（理数３年） 鈴木祐香（理数３年） 藤田裕介（社会３年）	裾花川での川遊び・魚つかみ・すいかを栽培してすいか割り。小豆・大豆・ごまを栽培しておはぎづくり。

不登校生，定年退職者を対象とした「信大茂菅農業義塾」の開設

1	平成21年度	肥野沙也香（野外３年） 藤田裕介（社会３年） 飯村昌史（臨床心理学専修２年）	新規に開墾した畑２アールを義塾の農地とし，一人が１畝を自分の畑として管理し，自由に作物を栽培する。

参考文献

赤峰勝人『循環農法』，なずなワールド，2008年９月

木村吉彦『気付きの質を高める生活科12カ月』，学校図書，2008年５月

木村吉彦『大学における「生活科・総合学習」授業の探究』，上越教育大学，2008年３月

土井進編『信大茂菅ふるさと農場における教育実践研究―JAながの・長野市茂菅地区農家との連携―』，全106頁，信州大学教育学部教師教育研究室，2005年２月

土井進「信大茂菅ふるさと農場」10年目の「人づくり」戦略―信大茂菅農業義塾の開設―」，『地域ブランド研究』VOL. 4，pp. 70-96，信州大学人文学部

土井進「信大茂菅ふるさと農場を教材とした総合演習（米づくりと食育）の実践」，『教材学研究』第20巻，日本教材学会，pp. 209-216，2009年３月

文部科学省『小学校学習指導要領解説・生活編』，2008年８月

（2009年３月３日　受付）
（2009年４月７日　受理）